

名詞句の中に現れるダケとその作用域について

佐 野 真 樹

キーワード： 副助詞，名詞句，作用域，述語性，連体助詞ノ

要 旨

ダケは、その副助詞としての性質ゆえ、典型的な副詞と同様、用言を修飾するのが普通である。本論は、用言以外が、ダケによって修飾されるような「かかり先」となる例を考察する。具体的には、「女の子だけの部屋に入る」に見られるように、名詞句（「女の子の部屋」）の中にダケが現れるような場合である。もしダケが、「入る」のような用言しかかかり先として修飾できないのであれば、この例は「女の子以外の部屋には入らない」のようにしか解釈できないはずである。しかし実際は、「女の子専用の部屋に入る」という解釈、ならびに「女の子ばかりいる部屋に入る」のような解釈も存在する。本論では、このような解釈を、ダケが用言以外をかかり先としている例として扱うことになる。

1. はじめに

本論は、副助詞ダケが名詞句の中に現れた場合、述語にかかって作用域を形成するというダケの性質がどのように働くかを考察の中心とする。それによって、ダケのかかり先が、いわゆる用言といった、述語として典型的に働くものには限られないことが明らかになる。すでに佐野(1997a)において、格助詞のデが、ダケがかかることのできるような述語性をもつことがあることを論じたが、次節でこれを簡単に振り返って、以降の議論への下敷きとする。

2. 述語としてのデ

名詞句+デからなる後置詞句(デ句)が、手段や道具のような、具格的な意味役割をもっている場合、デは「…を使って」のような、述語と同様の働きをする(「左手でパソコンを打つ」→「左手を使ってパソコンを打つ」)。Sano (1985) および佐野 (1997a) では、このようなデの述語性によって、次のようなダケを含む文の曖昧性を説明した。

(1) 太郎は左手だけでパソコンを打つ

ダケは副助詞として述語にかかるという性質をもつゆえ、それがかかる述語的要素を文中に見いださなければならない。(1)で明らかに述語として働いているのは文末のウツである。しかし、もしデもダケがかかることのできるような述語性をもつなら、(1)ではダケはデとウツの2つを、それがかかりうる相手としてもつことになる。ダケがデにかかれば、(1)は(2a)のように、またウツにかかれば(2b)のように解釈される。

- (2) a. 太郎は左手以外(右手/両手)は使わずにパソコンを打つ
- b. 太郎は左手以外ではパソコンを打たない

ダケがデにかかるということは、デ句をダケの作用域とするということであり、文末の述語にかかるということは、その述語を主要部とする文全体を作用域とするということである。もっとも、ダケが文全体を作用域とする(2b)のような解釈は、ダケにある程度のアクセントをおいたほうが得られやすいと思われる。より近いほうにデというダケがかかりうる相手がいるのに、それを飛び越えてあえて遠いほうの述語にかかるためには、アクセントの力を借りたほうがよいということになる。いずれにせよ、ダケがウツにかかって(2b)のように解釈された場合の(1)は、同じようにウツにかかる次の(3)とかなり接近した意味になる。¹

(3) 太郎は左手でだけパソコンを打つ

(3)では、ダケがデ句の外側にあるため、ダケのかかる述語としては文末のウツしか

ないことに注意されたい。

(1) の、ダケがデにかかる読みと、(3)あるいは(1)の、ダケが文末の述語にかかる読みとは、言語的な意味のみならず、真理条件も異なることに注意されたい。たとえばもし太郎が右手あるいは両手でもパソコンを打つなら、(3)は偽になるが、ダケがデにかかる読みでの(1)はそうではない。(1)を(2a)で示したような「左手以外は使わずに…」のようなパラフレーズで考えると、このことは必ずしも明らかではないかもしれない。しかし、(1)は「…が、(もちろん)両手でも打つ」のように続けることができるのに、(3)はこのように続けると矛盾を起こすということを考えれば分かりやすいと思われる。

ダケがかかることのできるような述語性をデがもつのは、「…を使って」のように解釈される、道具や手段を表す具格としての用法に限られる。純粹に場所を示すようなデはそのような述語性はなく、ダケのかかり先にもならない。次のような例である。

- (4) 太郎は会社だけでパソコンを打つ

この場合のデは、純粹に場所を表している限り、ダケをそのかかり先として受け入れることはできず、ダケはデ句を飛び越えて文末の述語ウツにかからなければならない。したがって(4)は、(1)に見られたような曖昧性はなく、次の(5)と同様の、文作用域の解釈しかないことになる。

- (5) 太郎は会社でだけパソコンを打つ

3. 述語としての名詞

前節で概観した佐野(1997a)では、ダケと文末の述語とのあいだに介在する、ダケがかかりうる要素として、デを考えた。すなわち次の連鎖において、

- (6) …ダケ(…) X…Y (ただし Y は動詞のような述語)

X が、述語性を有する具格としてのデのとき、ダケはそれにかかることができる。

(6)で、Y のみでなく X も、動詞のような述語であれば、全体として統語的に複文

構造をなすものになる。すなわち、主文の述語として Y をもち、従属文の述語として X をもつような場合である。ダケがそのような従属文の中に現れれば、Y にかかって従属文作用域をとる場合と、従属文を飛び越えて X にかかり、主文作用域をとる場合とで曖昧になる場合が出てくる。次のような例である。

(7) 先生は生徒たちに[動物園だけを見学する]ことを許した

ここで「見学する」が(6)の X に相当し、「許した」は Y に相当する。角カッコで示したのが「見学する」を述語とする従属文である。その従属文の中にダケがあるのであるが、このダケは、「見学する」にかかり従属文作用域を取ることも、「許した」にかかり主文作用域を取ることもできる。それぞれの読みを(2)に倣って、「…以外…しない」という言い換えで表すと次のようになる。

(8) a. 先生は生徒たちに動物園以外は見学しないことを許した

b. 先生は生徒たちに動物園以外は見学することを許さなかった

(7) に対し、たとえば次の(9)のように続けることができるのは、(8a) のような従属文作用域の解釈においてのみである。

(9) …が水族館だけを見学することもも (別の選択として) 許した

これは、「水族館だけを見学することも許した」という文が、モの存在によって、ダケに対し従属文作用域しか許さないのので、これに先行する文の(7)のダケも平行して従属文作用域になることが強制されるからである。このモのように、他の副助詞が介在すると、ダケはそれを飛び越えて外側の述語(「許した」)まで作用域を広げることができない。ある副助詞 F₁ (ここではダケ)を含んだ句 XP (ここではコト節)にさらに副助詞 F₂ (ここではモ)が付くと、XP は F₁ の作用域に関して「島」になるのである。くわしくは Sano (1988, 1989)を参照されたい。

さて、今度は次の文を考えてみよう。

(10) 先生は生徒たちに[動物園だけの見学]を許した

ここで角カッコで示された名詞句は(7)の角カッコの従属文に対応している。(7)の動詞「見学する」が(10)では対応する名詞「見学」になっている。しかし「見学する」が行為を表すのと同様、「見学」も行為を表すものである。すなわち、統語範疇上は「見学」は動詞とは違うが、働きとしては動詞の場合と同様に、ある主体が(ある客体に対し)何かをするというような述語性を持っている。したがって(7)でダケが「見学する」にかかることができるのと平行的に、(10)では対応する行為名詞「見学」にダケがかかることができるはずである。実際、(7)の従属文作用域と主文作用域との曖昧性に対応して、(10)のダケも「見学」にかかる名詞句作用域と、文末の「許した」にかかる文作用域とで曖昧である。(7)の場合と同様に、これは(8)のaとbのような解釈に対応する。(10)に続けて次のように言ったとしよう。

(11) …が[水族館だけの見学]も(別の選択として)許した

(11)では、角カッコの名詞句に付いたモによって、ダケの作用域はその名詞句内にとどまることが強要されている。したがってこれに先行する(10)も、それと平行して名詞句作用域をとることが強制され、(8a)が表すような解釈になる。これも(7)の場合と同様である。(10)のような例は、(6)のXが名詞である場合に相当する。名詞であっても述語性を持てば、ダケがかかる要素になりうるということである。

(7)に見られる「見学する」は、漢語の名詞「見学」にスルがついてできた動詞である。しかしこのような関係ではない動詞と名詞でも、それぞれに作用域の曖昧性は観察される。次のような例である。

(12) 社長は人事課長に[新卒者だけを受け入れる]ことを許した

(13) 社長は人事課長に[新卒者だけの受け入れ]を許した

動詞「受け入れる」を用いた(12)も、その連用形による名詞形「受け入れ」を用いた(13)も、ダケの作用域が角カッコ内にとどまる読みと、文全体に及ぶ読みとで曖昧である。それぞれの読みは次の(14a)と(14b)のような言い換えに対応する。

(14) a. 新卒者以外は受け入れないことを許した

b. 新卒者以外は受け入れることを許さなかった／新卒者以外の受け入れは許さなかった

4. 述語としてのノ

前節で見た「動物園（だけ）の見学」「新卒者（だけ）の受入れ」のような名詞句はノを含んでいるが、このノは、単に主要部の行為名詞とその補部をつなげているだけである。少なくともこのノ自体に、ダケがかかることのできるような述語性はない。これは「動物園（だけ）を見学する」などに見られる目的格のヲが述語性を持たないのと同様である。これに対し、次のような名詞句はどうであろうか。

(15) 春子のパソコン

「パソコン」は行為名詞ではない。したがって「春子」は、「動物園」の「見学」に対する関係と違って、「パソコン」に対し意味上の目的語のような関係にあるのではない。むしろ、二つのあいだの関係は、春子がパソコンを所有しているというような、所有関係である。しかしこの関係は「春子」や「パソコン」自体から出てくるのではなく、ノによって接続されているということから出てくるものである。換言すれば、ここでのノは、統語範疇上は「動物園の見学」のノと同様、後置詞あるいは格助詞であるが、意味的には、二つの項を取り、一方に所有者、他方に被所有者の意味役割を与えるような二項述語である。そしてこのようにノが所有関係を表すような述語性を持っている場合は、ダケがかかる相手にもなるのではないかと予想される。実際、ダケを用いた次の(16)は、

(16) 春子だけのパソコン

「春子占有のパソコン」のように解される。この占有関係は、まさにノのもつ所有という述語的成分にダケがかかった結果出てくるものである。「…以外…ない」という言い換えで表すなら「春子以外（の人物）とは所有関係にないパソコン」のような解釈になる。（「パソコン」は「見学」などと違って述語性はないから、ダケがかかる相手にはなり得ないことに注意。）以下の例は多少抽象的な所有関係を表すものであるが、いずれもダケがつくことによって「専用／占有」というような意味が出てくるものである。

- (17) a. 自分だけの [部屋／時間] (「自分専用の部屋／時間」)
- b. 社長だけの車 (「社長専用の車」)
- c. 女性だけの権利 (「女性が占有する権利, 女性の特権」)

このようなノは, ダケがかかることのできるような述語性を持つ, 具格のデ以外の後置詞の例ということになる。

今度は次のような名詞句を考えてみよう。

- (18) 春子の [姿／様子]

「春子」と「姿」ないし「様子」との関係は, 広い意味での所有関係と言えなくもない。しかし上で見たような所有関係と違って, (18)に見られるのは, 分離不可能な関係である。そしてこれは, 主要名詞である「姿」ないし「様子」の性質によるものである。すなわちこのような名詞は, それが表すものに対して不可分の主体を必須補語として要求する。ノが要求するのではない。したがってノ自体には上で見た所有関係のような述語性を認める理由はない。ところが問題の関係を要求する主要名詞も, それ自体述語性を持っているとは考えられない。「姿する」や「様子する」のような対応する動詞表現がないことから述語性の欠如が示唆される。² もしこのような分離不可能な関係を表す名詞句は, その主要名詞にもノにも述語性がないとすると, ノの前にダケが現れても, かかる相手を名詞句内に見つけることはできないということになる。実際次のような表現は, これだけではダケの自然な解釈ができない。

- (19) 春子だけの [姿／様子]

これは, (16) (17)や「動物園だけの見学」「新卒者だけの受入れ」などに出てくるダケが, その中でかかり先を見つけて解釈を完結することのできるのと対照的である。(19)のような名詞句の中のダケが自然な解釈を得るためには, その名詞句のそとに, それがかかる述語的要素を見つけなければならない。次のような例である(角カッコは名詞句)。

- (20) a. 公園には [春子だけの姿] があった／見えた (「春子以外の姿はなかった／見えなかった」)

- b. 太郎は[春子だけの姿]を見た（「春子以外の姿は見なかった」）
- c. 太郎は[春子だけの様子]を観察した（「春子以外の様子は観察しなかった」）

ここでダケは文末の述語にかかり、丸カッコで示したような解釈を生み出すことになる。そしてこれは、ダケがはじめから問題の名詞句のそとについて文末の述語にかかる次の例と実質的に同じようなものになる。

- (21) a. 公園には[春子の姿]だけがあった／見えた（「春子の姿以外はなかった／見えなかった」）
- b. 太郎は[春子の姿]だけを見た（「春子の姿以外は見なかった」）
- c. 太郎は[春子の様子]だけを観察した（「春子の様子以外は観察しなかった」）

ただし、(20)は常に「春子」がダケの焦点であるのに対し、(21)は必ずしもそうでない。したがって厳密には、(20)は、(21)で「春子」がダケの焦点になったときの解釈と同じということになる。Taglicht (1984: 62ff) の「統語上の焦点」(syntactic focus) と「文脈上の焦点」(contextual focus) という区別を用いれば、角カッコで示された名詞句全体にダケがついている(21)は、その名詞句を統語上の焦点とし、その名詞句の構成素である「春子」「姿」「様子」などは、文脈上の焦点の候補ということになる。「姿」や「様子」が文脈上の焦点になるのは語の性質上ほとんどないので、多くの場合(21)では「春子」が文脈上の焦点になる。しかし「姿」でなく「後ろ姿」などとすれば、語の意味内容が豊かになった分、他との対比も想定しやすくなり、文脈上の焦点になるような文脈が考えられやすくなる。次の(22a)のような場合である。

- (22) a. 太郎は春子の後ろ姿だけを見たのであって、(春子の)表情は見えていない。
- b. 太郎は春子の後ろ姿だけを見たのであって、夏子の(後ろ姿)は見えていない。

「後ろ姿」が文脈上の焦点になっている(22a)に対し、(22b)は「春子」が文脈上の焦点になっている例である。「春子の後ろ姿だけ」を「春子だけの後ろ姿」で置き換えられるのは(22b)だけである。

(20)に見られる名詞句の中のダケが外側の述語にかかるのであれば、(16)や(17)の

名詞句の中のダケも、すでに見たようなノにかかる場合のみならず、外側に述語があればそれにかかってもいいはずである。たとえば次のような場合である。

- (23) a. そのメーカーは[教官だけのパソコン]をただで修理する
b. そのフェミニストは[女性だけの権利]を主張する

ここでダケが、直後の所有を表すノにかかれば、「教官専用のパソコンをただで修理する」、「女性の特権を主張する」といった名詞句内作用域の読みを与えることになる。しかしもしダケが名詞句を越えて文末の述語にかかれば、(23)のa文とb文は、それぞれ次のような解釈になるはずである。

- (24) a. 教官以外のパソコンはただで修理しない
b. 女性以外の権利は主張しない

しかしながら、このように文作用域の解釈をするためには、アクセントをダケに置いてやる必要があると思われる。さきに我々は、(1)のような例文におけるダケが、それがかかりうるデを飛び越えて文末の述語にかかる読みは、アクセントがあったほうが得られやすい旨述べた。(23)の場合も、(24)が表すような読みでは、ノという、目の前の可能なかかり先を無視して、文末の述語にかかり先を求めるのであるから、アクセントがあったほうがよいことは容易に予想できる。ただしこの場合、アクセントは(1)のような場合よりも、必要性が高いように思われる。このアクセントの問題については次の節で立ち戻る。もちろん、次の例のように、ダケが問題の名詞句のそとについて、はじめから文末の述語にしかかかり得ない場合はアクセントの必要はない。

- (25) a. そのメーカーは[教官のパソコン] だけをただで修理する
b. そのフェミニストは[女性の権利] だけを主張する

(20)-(21) のときと同様に、文作用域の読みでの(23)は、(25)で「教官」ないし「女性」がダケの(文脈上の) 焦点になっている場合と実質的に解釈が一致する。

今度は、部分－全体の関係、あるいは譲渡不可能な所有関係を表す名詞句の場合を考えてみよう。

- (26) a. 子供の耳
 b. 母親のおっぱい

このような関係は、(15)のような普通の（譲渡可能な）所有を表す場合と、(18)のように分離不可能な関係を表す場合との中間的なものと言える。もし(15)のノと同様に、(26)のノに所有を表すような述語性を認めれば、ダケがついた次の例は、カッコ内で示したような解釈になる。

- (27) a. 子供だけの耳（「子供以外には見られない耳，子供特有の耳」）
 b. 母親だけのおっぱい（「母親以外にはない，母親特有のおっぱい」）

しかしこのような解釈は、不可能ではないにせよ、あえてノに普通の所有関係を読み込んでいる点で特殊である。それよりは、これらの名詞句を文中に使って、ダケをその述語にかけたほうが、そのような関係を無理に読み込む必要がない分、自然な状況を表す解釈ができる可能性がある。次のような場合である。

- (28) a. 母親は【一番下の子供だけの耳】をほじくった／ほじくってやった（一番下の子供以外の耳はほじくらなかった）
 b. この赤ん坊は【自分の母親だけのおっぱい】を吸う（自分の母親以外のおっぱいは吸わない）

すなわち、これらの例は、丸カッコで示したような解釈が可能である。

前節で見た、対応する動詞をもつような行為名詞は、動詞同様、いわゆる項構造をもつ。(18)に見られる分離不可能な関係を生み出す名詞や、あるいは(26)に見られるような、部分－全体の関係にかかわる名詞も、「主体」を必須補語として要求するという意味で、項構造をもっているということが出来るかもしれない。しかしながら、ダケがかかることのできるような述語性はないという点で、これらの名詞は行為名詞と区別される。

5. アクセントと作用域

(23)の例文で、ダケが文末の述語にかかる文作用域の読みは、ダケにアクセントが必要になり、しかもそれは、(1)でダケが文作用域をとる場合より、必要性が高い旨述べた。(23)は、(1)と違って、ダケが名詞句の中に現れている。(23)でダケが文末の述語にかかるためには、この名詞句を飛び越えなければならない。名詞句という境界が作用域の拡大のための「壁」になっていると考えることは自然である。(23)では、より近くの可能なかかり先(ノ)を越えるということ、さらに名詞句の境界を越えるということ、この二つの要因のために、アクセントなしではダケが文作用域をとることが厳しくなっているものと思われる。(1)の文作用域のときのように、一方だけの要因だと、(23)ほどアクセントは必要にならない。たとえば(28)をもう一度考えてみよう。ここでのダケは、名詞句の中にあるという点では(23)と同様である。(28)は(27)のような名詞句を文中に用いたものであるが、このような名詞句に出てくるノを、ダケがかかり得るような所有関係を表すものとする、不自然な解釈になるというようなことを述べた。したがって(28)のノはダケのかかり先としては不自然で、名詞句境界を越えるという要因だけが、(28)ではダケの文作用域としての障害に実質上なることになる。そして実際、(28)が丸カッコで示したような解釈をもつためには、ダケにアクセントがあったほうがよいが、(23)の場合ほどではないと思われる。

しかしながら、事情はこれほど単純ではない。たとえば、(20)で見たダケを含む名詞句は、その中にダケがかかりうるものはなく、文作用域の可能性しかない旨述べた。つまり名詞句の境界を越えるという要因だけが関与してくることになる。しかし自動詞（あるいは非対格動詞）をもつ(20a)と、他動詞の(20b,c)とでは、後者のほうが要求されるアクセントは強いと思われる。すなわち名詞句境界を越えるのに必要とされるアクセントは、その名詞句を補部としてとる述語の性質（あるいはそれに伴う文構造）も絡んでくると思われるのである。アクセントを捨象して一般的に言えば、名詞句を（楽に）越えられるかどうかは、名詞句の内部だけでなく、外部の環境も関係してくるということである。

このことを確かめるために、最小対立例かそれに近いもので考えてみよう。まず次のような名詞句表現がある。

(29) 金閣寺の写真

ここで「金閣寺」は「写真」に対して被写体として解釈される。これは両者を結びつけているノの性質によるものではなく、「写真」という名詞の性質である。しかし「写真」自体に「動物園の見学」の「見学」のような述語性があるとは考えられない。つまり(29)の名詞句には、(18)のような場合と同様、述語性をもつ表現はない。したがってこの名詞句の中にダケが現れると、その名詞句のそとにダケがかかる述語を見いだすことになる。例として、次のようなものを見てみよう。

- (30) a. 太郎は[金閣寺だけの写真]を撮った
- b. 太郎は[金閣寺だけの写真]を見た
- c. 太郎は[金閣寺だけの写真]をなくした

これらの例に出てくるダケが、名詞句境界を越えて文作用域をとると、次のような解釈を与えることになる。

- (31) 太郎は金閣寺以外の写真は |a. 撮らなかった /b. 見なかった /c. なくさ
なかった|

(30a)が(31a)のように解釈されるのはさほど問題ないと思われる。ただし、「金閣寺の写真」の外側にダケがついた「金閣寺の写真だけを撮った」に比べれば、アクセントの力を借りたほうがよいということはあるかもしれない。この、文作用域を得るためのアクセントの助けは、(30b)ではさらに必要になってくるとと思われる。そして(30c)になると、もはやアクセントなしでは(31c)のような文作用域の解釈は困難か、人によっては、たとえアクセントがあっても、(ほとんど)不可能かもしれない。

「写真を撮る」は意図的な行為であるが、「写真をなくす」はそうではない、という違いがある。しかしこれはここでは関係してこないだろう。というのも、(30c)同様意図性が関与しない次の(32)は、(30c)よりもはるかに文作用域の読みがしやすいからである。

- (32) [金閣寺だけの写真]がなくなった (「金閣寺以外の写真はなくなっていない」)

(30c)と(32)の違いは、(20b,c)と(20a)の違い同様、他動詞と自動詞(非対格動詞)の

違いである。これと同様の対比は、次のような例でも見られる。「盗む」は意図性に関して「なくす」でなく「写真を撮る」と同類であることに注意されたい。

- (33) a. (だれかが) [金閣寺だけの写真] を盗んだ
 b. [金閣寺だけの写真] が (だれかに) 盗まれた

能動文の(33a)では、ヲ格名詞句内のダケが文作用域をとって「金閣寺以外の写真は盗まなかった」のような解釈を与えるのは(たとえアクセントがあっても)かなり難しい。しかし対応する受動文(33b)のガ格名詞句内のダケは、文作用域をとるのは(33a)ほど難しくはない。

(30)の例に戻ると、(30a)の動詞の目的語はいわゆる結果の目的語(effectum object)であるが、(30b,c)はそうではない。(30a,b)と(30c)との違いに関しては、たとえば「金閣寺の写真を撮った」と言えば「金閣寺を写真に撮った」とも言え、同様に「金閣寺の写真を見た」と言えば「金閣寺を写真で見た」と言えるのに対し、「金閣寺の写真をなくした」と言っても「金閣寺を(写真で/に)なくした」とはならないというような違いがある。³ もっとナイーブな観点では、(英語の類例ではよく指摘されるように)「写真を撮る」のような表現は、「写真をなくす」に比べ、その緊密性(あるいは慣用性)が高く、「写真を見る」はそれらの中間である、ということがある。このような違いが、ダケの文作用域の得やすさ、あるいはそれに伴うアクセントの必要性に関与してきているものと思われる。⁴

主文の述語の性質が関わってくるのは、名詞句の中にダケが現れる場合に限らない。すでに見た、コト節の中にダケが現れる場合でも同様の現象は観察される。(7)と(12)をもう一度考えてみよう。

- (7) 先生は生徒たちに [動物園だけを見学する] ことを許した
 (12) 社長は人事課長に [新卒者だけを受け入れる] ことを許した

これらの例で、ダケが主文の述語にかかって主文作用域をとるためには、より近い述語であるコト節内の動詞を飛び越える必要がある。したがって、その近いほうの述語にかかる従属文作用域の読みに比べ、主文作用域のほうは、アクセントの力を借りたほうが得られやすいはずであり、実際そうであると思われる。この主文作用域のためのアクセントの必要性は、あるいは単に主文作用域の得られやすさは、主文の述語の

選択によって変わってくる。次のような場合である。

- (34) a. 先生は生徒たちに〔動物園だけを見学する〕ことを許可した
- b. 先生は生徒たちに〔動物園だけを見学する〕ことを認めた
- c. 先生は生徒たちに〔動物園だけを見学する〕ことを強制した
- d. 先生は生徒たちに〔動物園だけを見学する〕ことを禁じた

判断には微妙なところがあるが、a から d にいくにしたがって、「動物園以外は見学することを…しなかった」というような、主文作用域の読みは(アクセントなしでは)難しくなると思われる。少なくとも、(7)と、(34c,d)とを比べると、文作用域は後者のほうが難しいことは確かであろう。

興味深いことに、コト節に対応する名詞句的表現を用いると、このような差はあまり明瞭に出なくなる。

- (10) 先生は生徒たちに〔動物園だけの見学〕を許した
- (35) a. 先生は生徒たちに〔動物園だけの見学〕を許可した
- b. 先生は生徒たちに〔動物園だけの見学〕を認めた
- c. 先生は生徒たちに〔動物園だけの見学〕を強制した
- d. 先生は生徒たちに〔動物園だけの見学〕を禁じた

すなわち、たとえば(10)と(35c,d)とを比べても、主文作用域の読みの得られやすさは、コト節の場合に比べると、差を認めにくい。さらに言うと、これらの例は、角カッコ内に「見学」のような、ダケのかかりうる行為名詞があり、それを無視して、しかも角カッコの(名詞句のような)境界を越えなければ、主文作用域を得ることができないにもかかわらず、ダケにはさほどアクセントは必要ないと思われる。Kikuchi (1994)では、「見学」のような行為名詞が、「パソコン」などの通常の名詞と異なる振る舞いを示すことが議論されている。Kikuchi の分析に基づいて、「見学」の補部として機能する「動物園(だけ)の」に対し、LF(論理形式)のレベルで名詞句のそとに移動するオプションを認めれば、これによってダケは、それ自体の作用域の取り方としては「見学」や名詞句境界を越えることなしに、文末の述語にかかることができる。このオプションのあるなしが、文作用域の得られやすさに関係していることになる。⁵

6. 自己作用域としてのダケ

ダケを含む、次のような名詞句を考えてみよう。

- (36) a. 古井戸だけの庭
 b. ちゃぶ台だけの部屋
 c. 脱臭剤だけの冷蔵庫

これらは次のように解釈することができる。

- (37) a. 古井戸しかない庭
 b. ちゃぶ台しかない部屋
 c. 脱臭剤しかない（入っていない）冷蔵庫

今まで見てきたように、ダケが述語的要素にかかるものであるなら、(37)のような解釈を受ける(36)のダケは、存在を表すアルのような述語にかかっているはずである。しかし(36)にはこのような述語は明示的にはない。仮にノがその働きをしているとしてみよう。そうすると、(36)が(37)のように解されるのと平行的に、ダケのない次のような例は、丸カッコで示したような解釈ができるはずである。

- (38) a. 古井戸の庭（古井戸のある庭）
 b. ちゃぶ台の部屋（ちゃぶ台のある部屋）
 c. 脱臭剤の冷蔵庫（脱臭剤のある／入っている冷蔵庫）

しかし、(38)の名詞句は、それ自体不自然な表現であり、少なくとも、カッコ内で示したように解釈されるためには、かなりの程度に文脈の支えが必要になる。それに比べて(36)は、それだけでも(37)のように解することはじゅうぶん可能であると思われる。これは、問題の名詞句を、一つの文の中に入れても同じである。まず次の二つの例はいずれも、文脈の支えがないと解釈できないということはない。

- (39) a. 古井戸しかない庭を眺めて暮らす
 b. 古井戸のある庭を眺めて暮らす

それに対し、次の例はどうだろうか。

- (40) a. 古井戸だけの庭を眺めて暮らす
 b. 古井戸の庭を眺めて暮らす

(40a)は、やはりこれだけで解釈できるだろう。すなわち(39a)と同義的な解釈である。しかし(40b)を(39b)と同義的に解釈するためには、あるいはそもそも(40b)に解釈を与えるためには、「古井戸の庭」の意図された意味——それが「古井戸のある庭」ということであろうとなかろうと——が分かるような文脈が別に与えられている必要があるだろう。

だとすると、ノ自体に存在を表すような働きがあるということとはできないことになる。そうではなくて、ダケは(36)のような環境で、いわば自らアル／イルのような存在を表す述語を補って、それにかかっていることになる。これは「補い」であって、会話に見られるような「省略」とは別である。もしたとえば(36a)が、「古井戸だけがある庭」のようなものから、(ガ)アルを省略してできたものとしたら、なぜ助詞のノが出てくるのか別に説明が必要になるし、何よりも、このような述語の省略は、一般に連体修飾節には見られないものである。

(36)では、ノに後続する主要部名詞が、存在の場所を表すものになっている。一般に、XダケノYの形の名詞句のダケが、自ら補った存在述語にかかるときは、その名詞句は、「Yという場所にはXというものしかない、そのようなY」というような解釈になる。すなわちXは存在の対象物、Yは存在の場所である。しかしこのような名詞句表現以外で、Yに当たるものがない場合でも、ダケによる述語の補いが見られる。次のような例である。

- (41) 多くの親友のほうが、仕事仲間だけよりよい

この例は、「多くの親友がいるほうが、仕事仲間しかないよりよい」のように解釈できる。存在述語イルを補った解釈である。この補いは、上の場合と同様、ダケ（および「多くの」）があるからこそ可能になっている。次の例と比べてみよう。

- (42) 親友のほうが、仕事仲間よりよい

この例を(41)と平行的に「親友がいるほうが仕事仲間がいるよりよい」のように解釈するには、かなりの程度の文脈による支えが必要であろう。それに対して(41)は、そのような支えは（少なくとも(42)と同程度には）必要でない。やはりここでも、ダケ（ならびに「多くの」）自体が存在述語を補っていることを示唆している。

(36)のような例に見られるダケの作用域を、特に「自己作用域」(self-scope)と呼ぶことにする。あるものにダケが付いてできたダケ句((36a)では「古井戸だけ」)のそとに作用域を作らずに、ダケは自らのダケ句を作用域としてみるとみることができからである。この自己作用域の読みと、ダケ句のそとに作用域を広げた読みとで、2通りあるいはそれ以上に曖昧になることがある。たとえば(38b)は、それ自体では自然な解釈が難しいことはすでに見た。少なくとも(38b)のノを所有関係を表すものにとり、「ちゃぶ台が所有する部屋」のように解釈することは普通でない。それに対し、次の例はそのような所有関係としての解釈が可能である。

(43) 女の子の部屋

すなわち、「女の子が所有する／使う部屋」のような解釈である。これにダケをつけた次の例はどうであろうか。

(44) 女の子だけの部屋

(44)は、所有のノにダケがかかる「女の子専用の部屋」のような解釈ができる。すでに見た(16)や(17)と同様である。しかしそれだけでなく、ダケの自己作用域の読みとして、「女の子しかない（女の子ばかりがいる）部屋」のような解釈もできる。(44)のような名詞句がさらに文中で使われると、その名詞句のそとの述語にダケがかかる可能性も加わる。次のような例である。

(45) 女の子だけの部屋に入った

すなわち(45)は、女の子ばかりがいる部屋に入ったのか、女の子専用の部屋に入ったのか、それとも女の子以外の部屋には入らなかったということなのか、曖昧である。(ただし最後の読みはダケにアクセントが必要になる。)これに対し次の(46)では、

(46) ちゃぶ台だけの部屋に入った

ノが所有を表さないのでダケはそれにかかることはできない。かといって（アクセントの力を借りて）文末の述語にかけようとしても、(38b)がそれだけでは適切な解釈が難しいのと同じ理由で、不自然な読みになってしまうことになる（「ちゃぶ台以外の部屋には入らなかった」は不自然な書き換え）。結局、自己作用域のもとでの、「ちゃぶ台しかない部屋に入った」という解釈のみが最も自然なものとして残ることになる。

(44)のような例の曖昧性は、すでに森田(1972)において指摘がある。森田は、次の(47)の表現の解釈について、(48)のように述べている。⁶

(47) 労働者だけの集会

- (48) [(47)は] (A)使用者側をシャットアウトした労働者自身の集会とも、(B)労働者しか出席していない集会ともとれる…(A)の「の」は所有の格助詞で「労働者」に重心が置かれ「集会」は労働者の所有物となる。(B)の「の」は断定の助動詞と考えられ、後続語「集会」に重心が置かれ、「労働者」は集会の所属物となる。(A)は体言の限定であり、(B)は断定的叙述または動詞の意味を前提とした限定である。

(48)の最初にある、(A)と(B)とによる(47)の言い換えは、これだけでは違いがはっきりしないが、(A)の意味のときのノが所有の格助詞で、「集会」が労働者の所有物であるとしているところから、(A)が、我々が所有のノにダケがかかっているとしたものに対応しているとしてよいだろう。ただ「労働者が所有する集会」が表現としては不自然であるのと同じ理由で、ダケが所有のノにかかったときの(47)を「労働者が占有する集会」のように言い換えるのも表現として不自然ということはある。一方(B)の解釈は、「…しか出席していない」ということから、存在述語を補った、我々の言う自己作用域の読みに対応していることは明らかである。(48)の最後で、(B)が断定的叙述または動詞の意味を前提としている旨述べているのは示唆的である。(B)の解釈におけるノを森田の言うように断定の助動詞（の連体形）とすれば、「断定的叙述」というのはそのノが担っているとしてもできるが、ノ自体には、すでに述べた理由で存在のような動詞の意味があるとは考えられない。すなわち、森田の言う、前提とされた動詞の意味とは、ダケが自分自身で補った存在述語である。

7. 結びにかえて ―シカとの対比―

最後に、本論で見たダケの性質を、副助詞（係助詞）シカと対比して少し別の角度から概観して、まとめたい。

ダケは「春子にだけ会う」のように、連用修飾語に付いて、用言を修飾する。この修飾の相手、すなわちかかり先を明示的に示しているのが、「春子にしか会わない」に見られる、否定で結ぶ副助詞のシカである。シカが、自分がかかる用言を、否定辞によってマークしているのに対し、ダケは、自分のかかり先をマークする手だてをもっていない。そのため、複文などで用言が従属節と主節とにある場合、ダケがどちらの用言にかかるか曖昧になることがある。例文(7)では、ダケが従属節の「見学する」にかかれば(8a)のように解釈され、主節の「許した」にかかれば(8b)のように解釈される。このような曖昧性はシカには見られない。すなわち、シカのかかり先が従属節の用言であれば「動物園しか見学しないことを許した」となり、主節の用言であれば「動物園しか見学することを許さなかった」と、別の表現になる。

ダケが、自分がかかる用言を、シカにおける否定形のように、特定の形で結ばせる必要がないことは、用言に対応する名詞形（行為名詞）もダケのかかり先になりうるということになる。(10)や(13)のような場合である。

ダケには、もうひとつシカとの重要な違いがある。すなわち、シカが常に助詞の後にこなければならぬのに対し、ダケは助詞の前にきてもよいということである。助詞二の前にシカがきた「春子しかに会わない」が非文であるのに対し、「春子だけに会う」は全く問題がない。ダケのこのような性質により、用言でない助詞でも、用言と同様の述語的性質をもてば、ダケによって修飾されるようなかかり先になるという、シカの場合にはない可能性が生まれる。その例が具格を表すデであり、所有を表すノである。所有を表すかどうかとは別に、連体助詞であるノの前にダケがくるということは、用言をもたない名詞句の中にダケが現れうるということであり、その名詞句の中に、用言と同様の述語性をもつ要素があれば、ダケはそれにかかることができるし、あるいは名詞句の外にかかり先を見つけることもある。

また、ダケのこのような比較的自由的な分布により、焦点を明示的に示すことができるということがある。「春子の姿しか見えなかった」では、シカの焦点が「春子」であるということは明示できないが、ダケなら「春子だけの姿が見えた」とすることによりそれが可能になる。

さらにダケは、それがどの述語にかかるかを明示しないという性質により、かかるべき述語自体が明示されない場合も出てくる。これが存在述語が補われる自己作用域の場合である。シカの場合は「女の子しかいない部屋」とは言えても、「女の子しか部屋」とは言えない。しかしダケの場合は、「女の子だけいる部屋」とも、それと同様の意味で「女の子だけの部屋」とも言えるのである。

シカがかかり先を否定で結ぶということは、かかり先を用言に自ら限定しているということである。ダケはその点自由である。だからこそ曖昧性も出るが、豊かな表現の源ともなっているのである。

注

1. ただし厳密には意味は異なりうる。以下の(4)と(5)のような、格助詞の前にダケがくる例と後にくる例のペアについても同様である。くわしくは佐野(1997b)および Sano(1998)を参照。
2. 「変な |姿／様子| をしている」というような言い方はあるが、これは「変な目をしている」のような表現と同類であり、問題の名詞自体に述語性があることを示すものではない。
3. この、「写真を撮る／見る」と「写真をなくす」との違いは、遠藤善雄氏の私信から示唆を受けた。
4. 本文で示された基準によると、(33)で用いられているヌスムという動詞はナクスと同じ部類に入る。また英語でも、次のような、名詞句からの抜き出しに関する許容度の違いはよく知られている。
 - (i) a. who did John {take/see} [a picture of __]
 b. ?*who did John {lose/steal} [a picture of __]
 ただし(ia)で、take と see とでは特に許容度に違いはないとされる。英語の名詞句からの抜き出しに関する比較的最近の議論としては、Diesing (1992: 97ff.) を参照。
5. 関連する議論として、長谷川 (1995) も参照されたい。
6. 実は、森田は(47)を、バカリを用いた「労働者ばかりの集会」との対比において考察しているのであるが、論点を明確にするため、その部分は省略する。このような対比に関しては、沼田(1992)も参照。

参考文献

- 長谷川信子 (1995) 「『の』のシンタックス」『言語』第24巻第11号, 62-69.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Kikuchi, Akira (1994) "Extraction from NP in Japanese." In M. Nakamura (ed.) *Current Topics in English and Japanese*, Hituzi Syobo.
- 森田良行 (1972) 「『だけ、ばかり』の用法」『紀要10』, 1-27, 早稲田大学語学教育研究所. (森田 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』明治書院 に所収)
- 沼田善子 (1992) 「とりたて詞と視点」『日本語学』第11巻第8号, 35-43.
- Sano, Masaki (1985) "LF-Movement in Japanese," *Descriptive and Applied Linguistics* 18, 245-259, ICU.
- Sano, Masaki (1988) "An LF-Representation Filtered out," *Studies in Language and Culture* 14, 130-146, Hiroshima University.
- Sano, Masaki (1989) "A Condition on LF-Representations," *Tsukuba English Studies* 8, 29-48.
- 佐野真樹 (1997a) 「ダケとデ, および場所格の具格化について」『日本語学』第16巻第3号, 64-77.
- 佐野真樹 (1997b) 「副助詞ダケの LF 移動におけるターゲットについて」『立命館文学』第551号, 152-188, 立命館大学.
- Sano, Masaki (1998) "On the Direction of Movement: A Case Study from LF-movement of *da* 'only'," *JELS 15: Papers from the Fifteenth National Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 161-170.
- Taglicht, Josef (1984) *Message and Emphasis*, Longman, London and New York.